

中国の教判から見るインド初期大乘研究の問題点

—「菩薩乗・仏乗・大乘」を中心に—

藤井淳

駒澤大学

中国の教判は現代のような歴史的な知識を持たない中国の僧侶たちによって形成・展開されてきた。中国の教判は現代の初期のインド大乘仏教の研究にとって有意義な点があるのだろうか。中国の教判は鳩摩羅什以降に始まり、吉蔵以降に本格化する。それはすでに四〇〇年以降のことでインドでは中期大乘の時期になっているため、初期の大乘仏教について中国の教判から引き出すことのできる有益な情報は少ないように思われる。一方で漢訳仏典という制約はあれ、彼らは現代の学者よりもはるかに多量の文献に目を通して比較していた。

中国では『維摩経』を「抑揚教」と位置づけ、「共の十地」を説くのは『小品』ではなく、『大品』と理解していた。一方で中国では、早い段階から阿含経を三蔵教という低い教えとして位置づけ、それについて本格的な分析をしなかった。そのような状況を踏まえ、中国の教判で指摘された点に着目して、それらの起源について①阿含／ニカーヤ・②アビダルマ・③初期大乘経典の中に展開を追っていくと初期大乘を考える上で興味深い点も浮かび上がってくる。

報告者が特に指摘しうるのは“地” bhūmi や“乗” yāna についての問題である。日本の研究は“乗”の問題に視点を偏重しがちなことは、中国の教判に影響されているためともいえる。「菩薩乗・仏乗・大乘」の初期大乘における理解については藤田祥道氏や渡辺章悟氏らの研究が新たな視点を提供しているが、現状ではそれ以前の理解が一般的でありつづけている。本研究では新しい研究成果を提出できないが、中国の教判を研究に活用するという別の角度から見ても再確認しておくべき点として示したい。

本発表では仮説的な部分が多く、発表者の専門を越えるところがある。領域外にチャレンジをすることで、シンポジウムにおいて各専門分野の研究者の批判を仰ぎたい。